徳島県立博物館

博物館ニュース

No.58

是川中居遺跡出土漆塗り櫛　（八戸市教育委員会蔵）

漆工芸は縄文時代晩期の亀ヶ岡文化の中で大いに発達した技術のひとつです。発見されるおもな漆製品は漆塗り土器と有機質の遺物である弓、腕輪、櫛、耳飾りなどです。

櫛は木や竹を数本並べて歯とし、その一方を糸でかがった後、それを包み込むように漆などをはりつけて形を整え頭部とし、その上から赤漆を塗って仕上げたと考えられています。この櫛は頭部を丸くしているものと、突起を持つものがあり、頭部中央に透かしのあるものもあります。櫛は歯が折れてしまい、頭部だけが残っている場合が多く、歯までしっかりと残っている例はあまりありません。

企画展『縄文の美』では、櫛ばかりでなく、弓、腕輪、耳飾りなど縄文時代の有機質の漆製品や漆塗り土器もふんだんに紹介いたします。

（考古担当：高島芳弘）

写された島のくらし　～出羽島の写真～

磯本　宏紀

写真群との出遭い

出羽島（てばじま）の民俗について調査する中で、出羽島のあるお宅に保管されていた大量の写真アルバムを見る機会に恵まれました。それらの写真は、大正期から昭和40年頃の間に撮られたものなのですが、その多くが、その時代、出羽島で暮らした人によって撮影されたものでした。昭和30年頃の秋祭りのシーン、鰯（いわし）の大群が港の中まで迷い込んできたときの写真、島中総出の運動会のひとコマなどがあります。

写真は撮影者の視点によって切り取られた一場面ですが、調査者の立場から見るなら、記録された場面の詳細がわかるだけでなく、撮影者が何を記録すべきだと考えたのか、知る手がかりにもなるはずです。一方、所蔵者が写真を繰り返しみることで、記憶が反復され、再構成されることもあるでしょう。一群の写真から、写真の資料としての意味と活用方法について考えてみましょう。

保管されていた出羽島の写真

今でこそ多くの人がカメラをもち、生活のさまざまな場面で写真撮影をしています。ところが、昭和30年頃には出羽島でカメラをもって写真撮影をしていたのは2人だけだと聞きます。写された写真1枚1枚が数少ない画像情報というわけです。その撮影者のうちのひとりは、現在は牟岐町（むぎちょう）に住んでいます。そして、数百枚の紙焼き写真と、数千枚にも及ぶであろう、膨大な数の各種ネガフィルムが保管されていました。さっそくそれらを借用し、目録を作成し、デジタルデータとして保管しています。そうした作業の中で気付いたのは、日常的なもの、当たり前に存在するものにはなかなかレンズを向けないということです。写真の多くは家族で出かけたときのものだったり、学校の運動会、卒業式、遠足、駅伝大会、秋祭り、それから、婚礼や法事のものだったり、特別な日の写真が圧倒的多数を占めるわけです。しかし、撮影者が意図したかどうかわかりませんが、そこに写り込んでいる背景、服装、しぐさなど興味深いものもたくさんあります。現在、その写真を見た私たちには鮮烈な印象を与えます。

たとえば出羽島港を写した景観記録として

たとえば、昭和30年頃に撮られた図1では、2本の幟（のぼり）が立てられ、出羽神社前を移動する神輿（みこし）の周囲のにぎわい、正装した人々の服装、現在ではコンクリート堤防に変わった石積みなどを確認することができます。図2は図1とほぼ同時期に撮影された写真ですが、神社付近を側面から岸壁に沿って撮影したもので、子供たちが水遊びをする姿を見ることができます。

図１　出羽神社前の秋祭り（昭和30年頃）
小栗三男氏撮影
田中幸寿氏所蔵

図２　水遊びをする子供たち
小栗三男氏撮影・所蔵

図３　出羽神社付近（平成17年2月）
筆者撮影

図４　神社前の家と岸壁（平成17年2月）
筆者撮影

図1　守住貫魚筆「新町橋渡初図」　松浦菊男氏蔵　縦84.0cm×横115.0cm

それでは、これら2枚の写真を、ほぼ同じ場所、同じ角度から平成17年2月に撮影した図3、4と比較してみます。神社の周辺に松の木が植えられ、少し枝が伸びてはいますが、そのままの場所にあるようです。一方で、昭和30年頃には家のすぐ近くまで海岸が迫っていたのが、岸壁が広がり、図2で1人の子供が腰掛けている石造物も据え替えられているのがわかります。この石造物は、現在は昭和43年建立の小さい歌碑になっているのですが、昭和30年頃のものとは明らかにかわっています。

高台から撮影された港の図5、6を比較してみましょう。この写真からも港にある松の木の変化がわかります。港の最奥部、写真中央辺りには数本の松の木を確認することができます。図6では松の木は図1、2でも確認した神社周辺のものしか見あたりません。図5から図6への変化について、聞き取り調査で得た情報を重ね合わせると、昭和20年頃まで「大型の鰹(かつお)船を港内に繋(つな)いでおくのに利用した木」であることがわかります。出羽島の多くの人に記憶された、港最奥部に松の木のある景観を、図5によって現在でも確認できるのです。

図5　港付近鳥瞰（昭和30年頃）
小栗三男氏撮影・所蔵

図6　港付近鳥瞰（平成17年2月）
筆者撮影

図7　写真を飾る一例（平成17年2月）
筆者撮影

特別な写真を飾っておくこと

写真は単なる画像の記録媒体になっているだけではなく、そこに写る人物の肖像が意味をもつという別の側面にも触れておきます。仏壇のある家では亡くなった人の遺影をおいていますし、多くの人が目にする場所で政治的、宗教的指導者などの写真が飾られることもあります。また、写真の所有者によって多数ある写真の中から特定の写真が選択され、特別に保管され、飾られるということがあります。

出羽島の観栄寺でも、高台から出羽島港と集落を見下ろす画角で撮られた、ちょうど図5のような写真を、大きく引き伸ばして額に入れ欄間(らんま)にかけてあります。また、図7は集会所の壁に写真や肖像画が掛けられた一例です。日常生活の中で記憶を反復する、あるいは地域を象徴するための「装置」となることも確認できます。

写真資料としての活用

さて、改めて書くまでもないのですが、博物館の展示には、たいていの場合何らかの写真が付されますし、そのほか資料の整理、管理のために撮られる写真もたくさんあります。ただ、今回の写真群は、1点1点は個別の写真資料という性格をもつと同時に、ある特定の個人が数十年にわたって撮影した写真であり、全体での撮影傾向を知る資料にもなります。何をどれくらい記録しようとしたのか、大量に撮影された写真からどれを選び出して紙焼きしたのか、撮られた写真がどのように扱われたのかも注目したいことです。今回の写真群から、特定の撮影者の視点を検討する「個人写真誌」、出羽島の民俗全般を写真で綴(つづ)る「写真民俗誌」としての整理が可能かもしれません。

借用した写真資料は現在整理中ですが、いずれ撮影者や出羽島の方々にも協力いただきながら、地元でも公開できればと考えています。

（民俗担当）

平成17年度 第1回企画展

縄文の美 ―亀ヶ岡文化の世界―

亀ヶ岡文化は東北地方の縄文時代最後の文化として広く知られています。繊細でていねいにつくられた土器、漆製品や遮光器土偶などが古くから注目されてきました。西日本ではほとんど見ることのできない亀ヶ岡文化の精華をご堪能ください。

また、徳島県出身の歴史学者・喜田貞吉と亀ヶ岡文化との縁についても紹介します。

■会　期　平成17年4月26日（火）～5月29日（日）
■会　場　博物館企画展示室
■観覧料　一般200円／高校・大学生100円／小・中学生50円
※20名以上の団体は2割引、土曜日・日曜日・祝日の小・中・高校生、学校の遠足は無料

【展示構成】

(1) 亀ヶ岡文化
(2) さまざまな形と文様の亀ヶ岡式土器
(3) 有機質遺物と漆工芸
　①漆と顔料　②漆塗り土器　③籃胎漆器と木胎漆器
　④西日本の漆製品　⑤箆形木製品
(4) まじないの道具
　①土偶・岩偶　②土版・岩版　③土面　④石刀
(5) 装飾品
(6) 実用の美
(7) 喜田貞吉と亀ヶ岡文化

里浜貝塚出土　鹿角製腰飾り
〔重要文化財〕（東北歴史博物館蔵）

是川中居遺跡出土　赤漆塗り壷形土器
〔重要文化財〕（八戸市縄文学習館蔵）

亀ヶ岡遺跡出土
遮光器土偶
〔重要文化財〕
（東京国立博物館蔵）

企画展関連行事

●**記念講演会**
『亀ヶ岡文化の成立　―三内丸山から是川中居へ―』
日時：5月8日（日）午後1時30分～3時
講師：岡田　康博氏（文化庁記念物課調査官）
会場：文化の森・21世紀館イベントホール

●**展示解説**
日時：5月1日（日）／5月15日（日）　午後2時～2時30分

●**土偶スケッチ**
日時：5月1日（日）／5月15日（日）　午前10時～午後4時

●**土製耳飾りをつくろう**（事前に申し込みが必要です）
日時：5月29日（日）　午後1時30分～4時

館蔵品紹介 1

手押しの一輪車

紹介する資料は、徳島市八万町大野在住の方から寄贈を受けた、大正時代（1912～26年）ごろに使われていたという、古い手押しの一輪車です。収穫物･燃料･肥料･土砂などいろいろな物の運搬に用いられました。このような一輪車は、民具の辞典などには、「ネコグルマ」という名称で記載されています。車のきしみが猫の鳴き声に似ていることに由来する名称だそうです。

図１を見てください。湾曲した二つの木を腕木とし、その間に入れた横木の上が荷台となります。前方に、大きな木を胴切りにした車輪がつけられています。腕木の細くなった部分を両手で持って押し、荷物を運びます。手で持つ部分あたりに綱がつけられていますが、これは、荷物を載せて運ぶ際に、車体を安定させ、手もとにかかる重量を軽くさせるよう、肩にかけるものです。

荷物運搬用に、車のついた道具が庶民の間で、用いられるようになったのは、近世以降とされています。紹介しているような一輪車は、瀬戸内地域では、明治時代（1868～1912年）の中期には使われていて、日清戦争のおり、中国で見てきた復員兵によってつくられたという話が伝えられているそうです。

また、全国的に見て、この型と同様の一輪車が用いられてきた地域には、偏りがあることが報告されています。瀬戸内地域・中国山地には多く分布するとされますが、その中で、広島県東部には少なく、米作地帯では稀であることが報告されています。鹿児島県歴史資料センター黎明館の資料の解説によると、南九州においては、薩摩半島の南部の山川町、開聞町、頴娃町、知覧町の一帯だけに分布するという特徴があるということです。

県内では、県立博物館のすぐ近くの、八万町大野に、この一輪車が残されていたので、そこで使われていたことがわかりました。けれども、ほかに一輪車について調べられたことは少なく、呼称をはじめ、ほかにどのような地域で多く使われていたのか、どういう由来で、いつごろから使用されてきたのかなどの特徴は、ほとんどわかっていません。

荷物を運ぶという普通の道具に見える、一輪車一点ですが、様々な課題を含み、今後の調査の必要と方向を示してくれる重要な資料のひとつとなっています。　（民俗担当：庄武憲子）

参考文献

・朝岡康二ほか編　1997『日本民具辞典』ぎょうせい
・磯貝勇　1971『日本の民具』岩崎美術社
・神田三亀男　1985「瀬戸内の一輪車」森浩一著者代表『日本民俗文化体系　第13巻　技術と民俗（上巻）＝海と山の生活技術誌＝』小学館　p.628

図１　手押しの一輪車の全体

図２　手押しの一輪車の車部分

館蔵品紹介 2

アサリから真珠！

昨年11月のある日の夕方、九州の実家に帰省中だった私は、両親らとともに夕食のアサリのみそ汁を食べていました。あるアサリの身を口にしたとき、何かが歯にあたるのを感じました。ふつうの砂粒よりやや大きめで、すこしやわらかめの感触がありました。

もしやと思い慎重に口から出してみたところ、小粒ながら２つの真珠が出てきました。ひとつはほぼ球形ですが、もう一つは雪だるま状の形をしています（図１）。このアサリは近くの町のスーパーマーケットでパック入りで売られていたもので、有明海産と表示してありました。同時に食べた他の個体からは真珠は出てきませんでした。

図１　アサリから出てきた真珠　大きい方の長さ1.85mm

真珠とは、貝の体中に貝殻と同じ成分が沈着してできるもので、貝殻の内面と真珠の表面とは同じ光沢をしています。また、どのような種類の貝にあってもおかしくないものです。ふつうの宝石の真珠は、アコヤガイ（真珠貝）の体内に、異物（核）と貝殻を分泌（ぶんぴつ）する組織（外套膜（がいとうまく））の切片を人工的に入れて作ります。アコヤガイ以外の貝（たとえばシロチョウガイなど）が利用されたり、稀（まれ）にはアワビ類のような巻貝からも宝石質の天然真珠がとれることがありますが、これらの貝はどれも殻の内面が真珠色に光っています。一方、貝の中には内面が真珠色の光沢をしていないものも多く、たとえばアサリ、シジミ類、ホタテガイ、マガキなどには真珠色の光沢はありません。仮にこのような貝が真珠を持っていたとしても真珠色にならないはずで、たしかに今回のアサリの真珠も殻の内面と同様の白っぽい色をしています。

図２　真珠を持っていたアサリ 殻長32.4mm

この真珠を持っていたアサリは、殻が著しく変形しており、成長段階で大けがを負ったことがわかります（図２）。けがをしたさいに砂粒を体内に取り込み、それが核になって真珠ができたのかもしれません。

アサリやシジミ類で真珠が見つかったとの記事が、たまに新聞などで報道されることがあります。一般的なアサリ真珠の大きさについてはあまり情報がありませんが、半球形で径3.7mm、高さ2.8mmのものが報告されている（小菅、1966）ので、今回のものは大きい方ではないようです。

なお、真珠は貝殻同様、炭酸カルシウム（アサリの場合はアラゴナイト）と有機物からできています。宝石として扱われるものの中では例外的にやわらかい物質なので傷つきやすいうえ、強く噛（か）めばおそらく簡単に割れてしまうでしょう。今回のような小粒のアサリ真珠の多くは、気づかれることもなく見過ごされているのかもしれません。

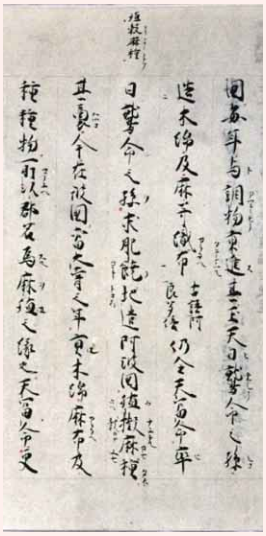
この真珠は、生物がつくる鉱物の一例ともいえるので、博物館の鉱物資料として登録しています。

（地学担当：中尾賢一）

レファレンス Q&A

徳島市にある忌部神社の由来を教えてください

徳島市二軒屋町の眉山南東中腹に鎮座する忌部神社は、阿波忌部の祖神天日鷲命を主祭神とすることで知られています。阿波の忌部神社の歴史は古代に遡るものの、現在地に神社がつくられたのは明治時代のことです。なぜそうなったかというと、複雑な経緯があります。ここでは、その概略を紹介しましょう。



嘉禄本古語拾遺（複製）
1226年（原著807年）
当館蔵
阿波忌部に関する部分

阿波忌部とは、古代の宮中祭祀を担当した忌部氏に従属した集団です。忌部氏の神話・伝承をまとめた『古語拾遺』や平安時代の法令書『延喜式』などによれば、天皇の即位儀礼である大嘗祭に際して、麁服という布を献上しました。また、昨年10月に吉野川市が誕生したことによって消滅した「麻植郡」（古代・中世は麻殖郡と表記）という郡名も、阿波忌部が麻を栽培したことに由来するという神話があります（『古語拾遺』）。

このような古代阿波忌部の紐帯だったのが、麻植郡にあった忌部神社でした。『延喜式』神名帳に登載された、いわゆる式内社で、その中でも阿波に三社あった大社のひとつでした。

そうした位置づけからすれば、阿波国ではとくに重要な神社だったはずですが、時代が降るうちに所在が分からなくなり、複数の神社が古代以来の忌部神社の系譜を主張するようになりました。そのため、近世から近代にかけて、所在地論争が続きます。所在不明となったのは、地震による崩落のためとか、戦国期に土佐から侵攻した長宗我部氏に焼かれたからなどと伝えられています。

現在の場所に忌部神社が置かれた直接のきっかけは、明治初年の所在地論争です。1815年（明治4）、全国の神社を対象とした社格制度が発足した際、古代の式内社である忌部神社が、所在不明のまま、神祇官所管の国幣中社に列格されます。そこで、神社の特定が急がれました。

ここで重要な役割を果たしたのが、小杉榲邨（1834～1910）でした。彼は、近世末から近代にかけて活躍した国学者として著名ですが、その考証により、1874年（明治7）麻植郡山崎村（吉野川市山川町）の忌部神社が、式内社の系譜を引くものと判断されました。

これに対し、美馬郡西端山（つるぎ町貞光）の五所神社を、古代の式内社である忌部神社に比定する見解が出され、激しい争いとなりました。本来は麻植郡にあった忌部神社の系譜を、美馬郡の神社に見いだそうとするのは奇妙なことですが、すでに『阿陽記』など、近世に民間で流布した地誌では、忌部神社がある地域はもとは麻植郡で、後に美馬郡になったとされ、美馬郡内にある阿波忌部の伝承や関係地が挙げられています。西端山側の主張には、そうしたものが底流にあったのです。そして、小杉の考証は却下され、1881年（明治14）、五所神社が忌部神社と決定されました。

このように、所在比定が難航したことから、1885年（明治18）には現在地に社地が求められ、1887年（明治20）に遷座祭を行って国幣中社忌部神社が新設されるに至りました。あわせて、五所神社は新しい忌部神社の摂社に位置づけられました。この決定については、異論はなかったようです。

ごく簡単に述べてきましたが、忌部神社論争の詳細については、まだ不明な点が多くあります。地域史研究のあり方や地域意識の推移を考える手がかりとして、追究が望まれる課題でもあります。

（歴史担当：長谷川賢二）

忌部神社（徳島市二軒屋町）

4月から6月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか?

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象（人数）
歴史体験	藍染をしよう	6月12日	10:00～12:00	小学生から一般(30)
歴史散歩	伊島を歩こう	5月29日	8:00～16:00	小学校高学年から一般(15)
	徳島城の刻印をさがそう	6月5日	10:30～12:00	小学生から一般(30)
野外自然かんさつ	眉山の地質ハイキング	4月30日	13:30～16:00	小学校高学年から一般(30)
	磯のいきもの①	5月8日	11:30～13:30	小学生から一般(70)
	磯のいきもの②	5月22日	11:00～13:00	小学生から一般(70)
	浜辺の植物	5月15日	13:30～15:30	小学生から一般(20)
	鳴門の地層観察	6月12日	14:00～16:30	小学生から一般(20)
室内実習	アンモナイト標本をつくろう	4月17日	13:30～15:30	小学校高学年から一般(20)
	春の野草かんさつ	4月24日	13:30～16:30	小学生から一般(20)
	ミクロの世界ー電子顕微鏡で昆虫を見よう①(午前)	5月29日	10:30～12:00	小学生から一般(10)
	〃 (午後)	〃	13:30～15:00	小学生から一般(10)
	ミクロの世界ー電子顕微鏡で化石を見よう①	6月19日	13:30～15:30	小学校高学年から一般(10)
歴史文化講座（海南文化館）	亀ヶ岡文化と喜田貞吉	5月22日	13:30～15:00	小学生から一般(50)
	中世阿波の熊野信仰	6月26日	13:30～15:00	小学生から一般(50)
企画展関連行事	企画展「縄文の美」展示解説① ※	5月1日	14:00～14:30	小学生から一般
	企画展「縄文の美」展示解説② ※	5月15日	14:00～14:30	小学生から一般
	土偶スケッチ① ※	5月1日	10:00～16:00	小学生から一般
	土偶スケッチ② ※	5月15日	10:00～16:00	小学生から一般
	企画展「縄文の美」記念講演会	5月8日	13:30～15:00	小学生から一般(300)
	土製耳飾りをつくろう ☆	5月29日	13:30～16:00	小学生から一般(30)
その他	子どもの日フェスティバル	5月5日	9:30～16:30	小学生から一般

◎歴史文化講座、企画展関連行事（☆を除く）は、申し込み不要です。
　その他の行事は、往復はがきでお申し込みください。（受付は，各行事の1カ月前から10日前必着でお願いします。）
◎室内実習「ミクロの世界ー電子顕微鏡で昆虫を見よう①」については、午前・午後の希望も書いて下さい。
◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。
◎企画展関連行事のうち、※は企画展観覧料が必要です(小・中・高校生は無料)。その他の行事の参加費は無料です。
◎お申し込み・お問い合わせは、徳島県立博物館普及係まで。（　088-668-3636）

2005年度　友の会会員募集

博物館友の会は、さまざまな活動を通じて自然や文化に親しむとともに、会員相互の交流を図っています。

2005年度も自然体験や研修旅行などの行事が予定されています。ご家族や友達と一緒に友の会に入会してみませんか。

友の会会員になると

・年間を通して常設展・企画展の観覧料が無料です。
・博物館ニュース・催し物案内・会報等が送付されます。

※詳しいことは、徳島県立博物館内の友の会事務局までお問い合わせください。

博物館ニュース No.58

■発行年月日　2005年3月25日
■編集・発行　徳島県立博物館　〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL088-668-3636　FAX088-668-7197
http://www.museum.comet.go.jp